

1. 村々の概観について

- ・町の中心部である加村(加岸)と流山村(根郷、宿)は江戸川に接して位置し、18世紀に水運関係で発展、18世紀末から酒造りの町として発展、19世紀前半からは、味醂等醸造を中心に発展。町場の生活を形成させた。
- ・町場の後背地である市内南西部の通称鱒ヶ崎台(今回検討範囲(三輪野山、加村(加台)、西平井を含む)は台地の縁に集落を形成した純農村地帯だった。台地上は古代から人々が生活してきた地(弥生時代 加村台遺跡等)。尾根上に、三輪茂呂神社(延喜式の式内社候補社)と鱒ヶ崎を結ぶ直線の道路が延び、道路両側には古墳時代から奈良・平安期等を中心に集落跡(加町畑遺跡や三輪野山各遺跡)等や西平井の流山廃寺の軒丸瓦等、多くの遺跡が発掘されている。
- ・又各村から中世期の板碑も見つかっている。

2. 伝説や草分け伝承、中世のムラ、近世村の成立について(寺社の創設、御朱印地拝領、検地、宛行等から推定)

- ・流山地名伝説「赤城碑」(建長年間(1249~56)上州赤城・・・)
- ・六軒百姓伝説(平井2,須藤,石川,寺田,某)某以外は現存。
- ・「三輪の山」言い伝え(景行天皇御代に東国に派遣された豊城命・・・)
- ・八木発祥伝説の8ヶ村(西平井、加を含む),中世には矢木郷/矢木庄が存在した。
- ・本土寺過去帳:永享4年(1432)ヤキ西平井、矢木加村、永享9年(1437)カムラ等
- ・近世村の成立
 - ・三輪野山村~太閤検地 天正2年(1592),三輪神社御朱印地25石 天正3(1593)。
 - ・西平井村~本覚寺 元中元年(1384)、慶長期?宛行(1596~1615)
 - ・加村 ~宛名寛永2年(1616),本行寺(1308),光照寺(1592),大宮神社(1605以前)
 - ・流山村 ~(宿)長流寺~慶長12年(1607)、赤城神社(1620再建),(根郷)常与寺(1637移設)
 - ・西平井村・流山村・加村~小金領野馬売付之帳 慶長19年(1614)

*三輪野山,加(台),西平井の各村は、既に古代から集落(ムラ)があり生活を営みんでいた事が分る。

近世の各村の成立時期は各記録の最古のものを辿ると、概ね16世紀末から17世紀初めにかけての成立と推定。

3. ムラの区分(坪、組)と付き合いの文化

- ・町場の宿や根郷では農村部の坪(組)に該当するのが「組」
(根郷:壱ノ組~九組の大正中期の組割図と職業・屋号の入ったもの,宿の組の存在も掲載されている)
- ・根郷の組:組の成立時期・形態・五人組からの派生か等を市博物館に問合せたが不明。・宿の組:左記同様不明
- *旧六の組(流山3丁目)の文化15年(1818)庚申塔の記名者は現在も残る屋号等から根郷全体であった事が分かる。
庚申講も一つだったと推定。博物館も同見解。講は明治後期、猿田彦を主祭神にして六組が主体になって復活させ現在に至ったものと推定。宿や根郷の組は、近代になってから組番号化により、社会組織を機能させる事を目的に村の管理組織として作られたと考えるのが妥当である。
- ・農村部の「坪」:西平井の坪名は「台、ニガヤ、南」*律令制の条里制坪と同様概念を持つ坪なのか等は不明。
- ・流山村(根郷、宿):町場は組単位で生活。(例外葬式手伝いは組を越えた五人組。葬式執行は組内で実施。
- ・西平井村:組織の古形血縁組織の「岡本ヱツリ、渡辺ヱツリ」が一族共同墓地や祖先供養を中心に強い結束力を所有。

4. ムラの講について

(1)江戸時代に、四村共通で江戸時代に盛んだったと考えられる講等。

念仏講、送太師江戸川八十八ヶ所等、稻荷信仰、成田信仰(成田講)、庚申信仰(庚申講)

(2)江戸時代に、各村で盛んだったと考えられる主な講

*流山村の富士講:流山村に江戸期の浅間塔はないが近隣村にはある(古間木村1、下・小屋等2)。

江戸期から浅間神社(1644創建)は存在し東葛の代表的な村。

これらの事から江戸期から富士講は存在し、代参参拝していたと推定。嘉永六年 古間木塔には(古間木,思井,西平井,鱒ヶ崎等人名)。同年に横須賀村も富士山参拝「道中日記覚」記録有(旅程7泊8日、吉田の御使が案内、帰路は須走/大山/鎌倉/江の島等)

*流山村の庚申講について:

根郷~前3項の流山三丁目(旧六ノ組)庚申講。宿~流山五丁目庚申講(庚申様、祠内に庚申塔)

*加台の題目講:日蓮宗檀家が参加,10軒程度,加台は半分づつ、加岸は別日)。念仏講(日蓮宗檀家以外の各宗派が参加。60代の女性が中心。男女一緒から大正末期からは女性中心に移行。S57頃までに廃止。)

*加岸の大杉講:江戸川ベリの生活に密着した水運関係の信仰は必要不可欠。現在も祭り神輿を実施。

(3)平成3年3月時点、四村に共通で存在していた講:念仏講。

念仏講は宗派により名称異なる。浄土・真言宗は念仏講。法華(日蓮宗)は題目講又は妙法講。

(4)四村で現在も存在している講:(根郷)庚申講・清正講等。

* (向小金では念仏講(向小金香取神社の墓域内「リョウ」で実施)

5. 村の戸数（江戸期の概数）参考値

- ・農村部（江戸通期）・加村（加台）40戸強程度。西平井村40戸程度。
（石高戸数人口データがある鱈ヶ崎村の石高と各村の石高の割合比で戸数を仮算出概数）
- ・三輪野山村 24戸（村絵図の戸数をカウントした概数）
- ・町場

*町場数は超概数の参考値。

・文化年間の数は多功絵図から家並みカウントの概数値

- ・（宝永4年）流山村御見地水帳 根郷分、宿分屋敷地より
- ・（弘化2年）下総国旧事考流山村。凡戸数三百。「流山みりん物語」（川根正教著）

町場	宝永年間 (水運発展期)	文化年間 (酒造の街の発展期)	弘化年間(味噌を中心に した発展期)	明治八年 (県交付録)
根郷	48	114	150	341
宿	53	116	150	
加岸	-	46	-	-

*村々の戸数算定について、江戸期は農村部は大きな増減なし、町場はいくつかの発展期によって大きく増加するがデータ資料不足の村々もあり、又、公民の割合や一日当り米消費量換算等、前提条件の考え方や絵図等の見方等を良く理解せず時間を要し、一部の断片的な概数を示すのみに留まった。今後は学習を続け算定手法等を身に付けたい。

6. 庚申塔探訪（四村の今回調査した58塔（真城院は机上調査のみ。）の中から）

NO	西暦	和暦	場所、種別、特徴等	写真	備考
1	1666	寛文 6	流山・光明院 大日如来像 [庚申講と念仏講の 祈願対象として建 立]（逆修）		四度移設されているが「浄円坊」（江戸川大師八十八札所元七番）の場所が自身では不明により探索した。（事務局様共有の「不明点/疑問点回答集」や「江戸時代の流山を旅する（青木更吉）」に四度移設とある。）。「流山の講」「流山の道」「流山電鉄78年に掲載の地図」や「におどりに掲載の写真」では不明だったため近くの古老の方に尋ね、概ね場所は判明した。現光明院の大日如来像造立場所のフェンス反対側（赤城神社側）に、当時「浄円坊」使用の石類が置かれている事もお聞きし確認した。*これについては光明院の住職等に別途確認する事とした。
2	1667	寛文 7	加村（平和台） ・大宮神社 延命地藏 [大願心誉上人]		・1592年光久寺（時宗）一時中絶後1644年心誉上人が光照寺（浄土宗）を中興。この庚申塔の横に「聖観音像」が2塔あり。この2塔にも心誉上人の名が刻まれている。光照寺として再興した心誉上人を、今後詳しく調べたい。 ・1804年1817年1831年の庚申塔3塔のセワ人や記者名に、「善照院」と刻字されている。 *かつて大坂上にあり大正期に廃寺になった元「善照院」（真言宗）が深く関わっていたようだ。
3	1714	正徳 4	加村（平和台） ・大宮神社 題目庚申塔 [南無妙法蓮華經]		題目塔は市内計2塔のみ。八千代市に数多くの日蓮宗庚申塔がある事が判り、市郷土歴史研究会会員に質問し回答：日蓮宗オンリーの八千代市の北西部は中山法華経寺の旧神保領に属する寺院。村々が「神保組千部講」を構成。地域として歴史的に強い宗教的結束を保ってきたとの事。 *田村副理事長から題目塔と日蓮宗について解説いただいた。「日本の仏教は浄土はあの世（来世）にあるとしている中で、日蓮宗の教えは、浄土は現世にあるとしているため庚申信仰とは相容れないものがあつた。流山の2塔には2世安楽の文字無く現世供養として建てた」との解説。 *前記八千代市会員に質問し日蓮宗系234基の銘文を机上確認したが確かに二世安楽は無い。との回答。

四村で特徴ある庚申塔(上記以外)
 【西平井村（大原神社）前平井村との合同造立の庚申塔。同様共同の造立は、鱈ヶ崎雷神神社等にも有り】
 【宿・（流山寺）百庚申「多石百庚申」。多数の方が功德有効との「数量信仰」に基づく。尚「一石百庚申」は市域にはない。
 宿・流山五 青面金剛立像、庚申様（造立年不明）55歳位の婦人達が参集）、・宿（番場）高市氏宅地内（大正6年）】。
 【加村（大宮神社）「庚申」の文字塔、文字塔の初見1814年（現世供養中心に変化）】等々。
 【三輪野山村（三輪茂呂神社）・千庚申塔・道標機能をもつ庚申塔（三村境から他1塔と移設、西馬口道は羽口渡意）・墳頂より移設の塔】
 *尚、百庚申/千庚申については、H28.7にて中野（隆）さんが、市域の各場所の百庚申/千庚申を、詳細の解説をされている。

・今後について

庚申信仰について初心者で、「中国の道教の教え「三尸説」由来の庚申信仰が、日本の様々な民間信仰と融合した。」との事しか知らなかった。寺社などに多数ある庚申塔の説明受けても不明な事ばかり。塔の造立は江戸期が大多数だが、聞き書き等も、ごく一部しか記録なし。明治時代に急速に講が解体されていったと考え、多数あつた他の講の様子も調べようと考えた。本年1月HP連絡の窓に「庚申信仰について（田村さん）」が掲載された。これに興味を持ち深訪自主トレをスタートしたが不明点等が多く、オンラインミーティング等にて皆さんに基本的なことを質問。その間に同じ居住地（向小金）の塩崎先輩に質問等をしている中で、旧流山町六村の庚申信仰の周辺を一緒に少し深掘りしようとの事となり、村々を分担して調べた。田村さんより基本事項として「庚申信仰は年代/地域で必ずしも統一されていなかった。固定的なものではなかったことを、理解しておく必要がある。」と質問の中で解説いただいた。今回田村さんより塩崎さん佐藤へ投稿の勧めあり、各自の未整理資料等を取り纏めたもの。今後は、今回調査の村々や東部地区以外の各石神仏も調査する等、自主トレを進めたい。

- （今回の参考図書等） ・流山市史「民俗編」・流山市史「通史編I」・「流山の庚申塔探訪、〃講、〃石神仏」・流山市研究「創刊号、三号」
 ・論文「庚申信仰について」*取扱い注意(田村哲三著) ・「流山みりん物語」(川根正教著)

*今回、民間信仰について四村の庚申講以外の講についても調べた。皆さんの地区で現在も続く講をご存じでしたら教えてください。

参考下記URL ↓：民間信仰等の分類表（四村）（クラウドgoogleドライブ）

https://drive.google.com/drive/folders/1xIRc0KB-TWhgrE8qxNc_q6BZMMbQd9Wm?usp=sharing